



【役員名簿(2015-2017)】(五十音順)

代表	管 啓次郎 (明治大学)
副代表	結城 正美 (金沢大学)
顧問	上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
	西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長	高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
事務局補佐	辻 和彦 (近畿大学)
	浜本 隆三 (福井県立大学)
会計	相原 優子 (武蔵野美術大学)
	大野 美砂 (東京海洋大学)
監事	上岡 克己 (高知大学)
ニューズレター編集委員	浅井 千晶 (千里金蘭大学)
	豊里 真弓 (札幌大学)
	巴山 岳人 (和歌山大学・非)
会誌編集委員	黒崎 真由美 (関東学院大学)
	塩塚 秀一郎 (京都大学)
	芳賀 浩一 (城西国際大学)
	波戸岡 景太 (明治大学)
	John Rippey (滋賀県立大学)
コンピューターセンター運営委員	岩政 伸治 (白百合女子大学)
	北国 伸隆 (明治大学・院)
	山城 新 (琉球大学)
評議員	Bruce Allen (清泉女子大学)
	池田 志郎 (熊本大学)
	石幡 直樹 (東北大学)
	太田 雅孝 (大東文化大学)
	小谷 一明 (新潟県立大学)
	茅野 佳子 (日本大学・非)
	木下 卓 (愛媛大学)
	塩田 弘 (広島修道大学)
	高橋 龍夫 (専修大学)
	高橋 勤 (九州大学)
	高橋 昌子 (慶応義塾大学)
	巽 孝之 (聖心女子大学)
	中川 僚子 (滋賀大学)
	林 直生 (日本大学)
	平塚 博子 (日本大学)
	村上 清敏 (金沢大学名誉教授)
	横田 由理 (大東文化大学・非)
	吉田 美津 (松山大学)
院生代表	戸谷 洋志 (大阪大学・院)
広報	喜納 育江 (琉球大学)
	河野 千絵 (日本大学・非)
	松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成	岡島 成行 (青森山田学園)
	乳井 昌史 (早稲田大学)
	野田 研一 (立教大学)
	山里 勝己 (名桜大学)
	管 啓次郎 (代表)
	結城 正美 (副代表)

再野生化する「低い土地」で

代表 管 啓次郎 (明治大学)

この夏はオランダを旅行した。前回は首都アムステルダムだけだったが、今回はいくつかの地点を巡って、かなりの距離を車で走った。おかげでオランダの独特な土地のあり方が、少しわかってきた。スキポール国際空港が海拔マイナス6メートルの高さにあると聞くと誰でも驚くと思うが、まさにその事実が物語るとおり、全体としてオランダの国土は平坦で、標高は非常に低い。フランス語を学びはじめたころ、オランダのフランス語名が「ペイ＝バ」つまり「低い国々」だということで、そのあまりのストレートな表現に笑ったことがあったけれど、笑うも何もそれはただ国土のあり方をそのままにしめす呼び名にすぎなかった。旅の途中で出会ったオランダ人が、「オランダは要するにアルプスから発して北海に流れこむ川が作ったデルタ地帯なんだ」と説明してくれて、納得がいった。ライン川をはじめとする大河が、過去数十万年、毎年ものすごい雪解け水とともに削った岩石を流してきたのだろう。それが溜まり、削られ、削られ、想像もつかない年月をかけて微細な粒の粘土層を形成してきたのだろう。そこに生じる遠浅の海にダム(堤防)を作り、堤防の内側の水を抜けば、そこはポルダーと呼ばれる干拓地となる。それがオランダの国土の本質だ。

平坦な風景がつづく。山が見えないのはたしかに物足りないが、海沿いどころか海そのものを渡ってゆくような長い堤防を走ったり、あるいは草原を眺めやり果てしなく並ぶ風力発電用の巨大なプロペラ群に圧倒されたりしていると、その風景が意外なほど雄大なこともわかってくる。人口密度が非常に高い国であるはずなのに、せせこましいところがまったくない。都市は都市、それ以外の田園や草原、森林との区分がはっきりしているからだろうか。そしてときどき、驚くべき景観に出会う。たとえば、海沿いの堤防を走っていて、内陸側にも大きな池が見えるとき。海面のほうが、池のある陸地よりもかなり高いのだ。あるいは風車のある田園地帯を走っていて、突然、野原よりも高い位置を舟が行くのを見上げることがある。切り開かれた水路のほうが、周囲の地面(もともとは湿地の水底か)よりも上。あるいはまた、かなりの内陸部で、周囲よりもいわれてみればわずかに小高くなった丘と巨石がある。そこはかつて海辺の漁村だった場所なのだ。そんな風に意外な発見が連続して、飽きることがない。

今回のオランダ行きには、はっきりとした目的があった。昨年見たオランダのドキュメンタリー映画 *De Nieuwe Wildernis* [The New Wilderness] (2013) に、大きな衝撃をうけたのがはじまりだった。映画はアムステルダム近郊の自然保護区オーストヴァーデルスプラッセンの動物たちを追ったものだ。この土地を見に行こうと思った。もともと工業用地とすべく造成されたポルダーが、誘致の失敗などでしばらくそれ以上に利用されず放置されたのだという。するとそこに野生動物たちが集まってきて、サンクチュアリを作り上げた。多くの鳥たち、鹿、きつね。試験的に放たれたコニック（野生馬）は繁殖し、いまでは2000頭近くいる。この一帯が、アムステルダムの市街地からわずか30キロあまりの場所にあり、当然ながら土地のすべては海面下の高さで、開発され放置されてからわずか40年ほどで、この信じがたい動植物の楽園に姿を変えたのだ。映画製作者たちは、ここを新しい野生の土地と呼んだ。タイム・ラプス撮影が、息を飲むイメージを見せてくれる。生命の年ごとの更新と、生存をおびやかす自然の荒々しさととの戦い。ヨーロッパのこの片隅で、ヒトの手の介入を離れた場所で、生命の実相が刻々と演じられている。



この映画を知ったのは写真家の赤阪友昭を通じてのことで、彼は映画のタイム・ラプス撮影を担当しているポール・クレイヴァーの友人だった。2014年の夏、赤阪さんとぼくは、アラスカはジュノー郊外に住むリン・スクーラー（星野道夫の親友だった写真家・作家）の家において、ぼくらの会話に何度もくりかえし出てきたのがre-wildingという単語だった。再野生化。この言葉はジュノーにおいてですら、すでに強いリアリティがあった。20世紀初頭までは人が住んでいた小集落のいくつかが、放棄され、数十年も経たないうちに、

そうといわれなければそこにかつて人がいたともわからない、原生林に戻っている。自然のプロセスにまかされた土地は、驚くほどの短期間で、人工物と人間世界（広義の「都市」）の痕跡を払拭する。ヒトの歴史は地表の改変の歴史であり、自分たちの都合にしたがった生態系の整理であり、植物と動物とを問わず他の種の生存をもっぱら自分たちが決めるという恐ろしいほどの傲岸の積み重ねだった。だがいったんヒトが去ると、土地は自分を取り戻し、植物も動物も帰ってきて、ヒト以外の生命のコミュニティをたちまちのうちに取り戻す。

オーストヴァーデルスプラッセンがおもしろいのは、そのエリア自体、人間の作業により作られたポルダーという、もともと（少なくともわれわれに見通せる時間尺度の中では）海底だった土地だということ。ところがその海拔マイナス数メートルの土地が地表に現われ放置されるうちに、20年もしないうちにはっきりと、北海沿岸のこの地方の元来の動植物相が土地を占拠するようになったということだ。人為の上に接ぎ木された「再」野生化のプロセスが、ここを舞台に、図らずも実現された。そして昨年のアラスカと今年のオランダの旅を通じて、赤阪さんとぼくが何度も思い浮かべていたのは、福島土地だった。それも特定の、東京電力福島第一発電所の事故によりヒトの立ち入りが制限されるに至った区域のこと。ヒトが入れなくても、植物も、動物も、すべての野生の存在はそんなことはおかまいなしに生きてゆくだろう。放射能に遺伝子を傷つけられ、数々の突然変異を余儀なくされても、全体としての生命の流れは、むしろ人為の外で力を得るのではないか。そこには、われわれの想像をはるかに超えた、新しいウィルダネスの光景が遠からずひろがることになるだろう。

オランダの沿岸部がその土地としての本質をデルタ地帯の汽水域と湿原にもつように、福島の沿岸部もその元来の姿は鳥たちの集う湿原と鮭が遡上する河川にあった。そこに水田が作られ、原発が作られ、震災により水田は湯に帰り、数々の警告を無視してきた原発は予想の範囲内にあった大事故を起こし、原発周辺の土地はヒトが住めない地域となった。これはいうまでもなく現在進行形の出来事だ。そしてそれに並行して現在進行形なのが、制限区域内におけるre-wildingだ。このプロセスを、20年、40年のスパンで追ってゆきたいと思う。ワイルドとは結局、人為が加わっていない状態をさす言葉であり、ヒトが他の種に加える圧力の異常な強さを思うと、地表での人間世界の自己収縮は、いよいよ緊急の課題になっている。何が起きるのかはわからない。だが、あるいは他のかたちではわれわれの社会が果たしえなかった、ヒトの自己収縮の一例が、福島のその土地で見られることになるかもしれない。

【大会報告】

2015年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会

(2015年8月22日[土]～23日[日]@安藤百福自然体験指導者養成センター
[長野県小諸市])

8月に開催されました本年の全国大会では、文学だけでなく人類学や風景論など、大変幅広い発表が行われました。それはまた、エコクリティシズムという批評の豊かさを如実に示していたのではないのでしょうか。会員の方々に両日の内容について報告して頂きました。

<第一日目：8月22日>

●個人発表

●シンポジウム「動物のいのち」

戸谷 洋志 (大阪大学・院)

会場に到着した参加者を出迎えたのは、建築家の隈健吾氏によって設計された安藤百福センターの洗練されたデザインであった。建物の至る所に柔らかく温かみのある木材が使われており、会場の片側の壁は全面が窓になっている。そこからは、小諸の豊かな緑を一望することができる。

しかし、北国伸隆氏(明治大学・院)による最初の個人発表は、会場を瞬く間に別世界へと誘った。題目は「島の環境と民族の誕生——小笠原諸島におけるエスニック・グループ研究」。テーマは、1830年代から1876年までの文献を検証することで、小笠原諸島における「先住民」たちのライフヒストリーを多角的に描き出していく、というものであった。先住民たちは、日本が領有を宣言する前から小笠原諸島(Bonin Islands)に住んでおり、そのため「Bonin Islanders」と表記される。同発表において特徴的であったのは、「Bonin Islanders」をめぐる史的文献にノンフィクション文学としての価値を認め、これをエコクリティカルな視点から考察していく、という立場である。北国氏が展開する考証は、精密で実証的でありながらも、歴史に対する繊細な感性によって導かれていた。

二つ目の個人発表は、武田寿恵氏(明治大学・院)による『ライオンキング』の操り手——Julie Taymorの演出に見る「道具」としての動物であった。武田氏は、舞台演出家Julie Taymorが手掛けたミュージカル版「ライオンキング」に注目し、特にその仮面の用いられ方のうちに演劇史における動物表象の革新性を見出す。「ライオンキング」において敵役として登場するスカーは、分裂的で不調和な存在として描か

れている。武田氏に拠れば、そうしたスカーの分裂性を表現するために、Taymorは役者の仮面を大きく歪んだものにし、さらにこれを不安定に動かさせることで、役者の演技と仮面の操作が不調和をきたすように演出した。このように、役者と道具の関係によってキャラクターを表現するという点にTaymorの演出の独自性がある、と武田氏は指摘した。



(撮影：戸谷洋志)

続いて行われたのは、シンポジウム「動物のいのち」である。管啓次郎氏(明治大学)を司会に、石倉敏明氏(秋田公立美術大学)、木村友祐氏(小説家)、分藤大翼氏(信州大学)、山口未花子氏(岐阜大学)という個性豊かなパネラー陣によって、刺激的な議論の応酬が繰り広げられた。同シンポジウムの大きな狙いは、ヒトとその他の動物との関係を様々な視点から多角的に検証することで問題化することである。石倉氏は民俗学や人類学の知見を横断的に検討しながら、木村氏は自作の小説『聖地 Cs』を敷衍しながら、分藤氏はアフリカ・カメルーン共和国のバカ族をめぐる調査に基づいて、山口氏はカナダ・ユーコン準州に住むカスカの人々の調査に基づいて、それぞれに人間と他の動物の関係を論じた。パネリストたちに共通するのは、人間と動物の関係を真剣に、そして注意深く見つめる

眼差しであり、その観察から「動物のいのち」を新しい光のもとで捉えようとする姿勢であった。

●基調講演

●ラウンドテーブル

「いま石牟礼道子を読むということ」

古居 歩（立教大学・院）

東京へ帰って荷解きをする、リュックの底からクルミが一つ出てきた。表と裏に穴があって、これは森の動物が上手に開けたもので、中身はすっかり食べられている。このクルミを皆に配って見せてくださったのは、大会初日の基調講演でシートンのお話をされた動物学者・著述家の今泉吉晴氏だった。

「100年前のシートンの本ですが、今も価値がある。とりわけ今の動物学者に読んでほしい。その理由を今日はお話しします」と始めた今泉氏。シートンは、足跡・鳴き声・シルエットなど、生きた動物が自然の中で見せる姿を追い続けた。それは、博物館の標本を見たり、動物園という特殊な環境に置かれた動物を見たり、動物実験ではっきり見えた行動だけを見たりするのは違う。大切なのは、自然から直接学ぶということ。そして、動物と人間の友好的な関係なしに、自然の中の動物を見ることはできない。

私は最近、「見る」行為の負の側面、すなわち「見る」ことで権力関係が生じてしまう問題ばかりを考えていたようで、今泉氏の語る「見る」のあたたかさに、不意に新鮮な空気を吸い込むような思いがした。それから、ドキリとさせられたのは、「生態学（エコロジー）の理論だけをやるのは、流れだけを見るのと同じ。経済学に似ている。たしかに生態系は大事だが、それだけではない」といった旨の言葉だった。エコクリティシズムに関わる者にとって、無視できない問いではなかったろうか。

今泉氏の講演にすっかり影響された私は、二日目の空き時間に外へ出て、東京では見られない小諸の植物・

虫を見て遊んだ。楽しかった。

続いてのラウンドテーブルでは、結城正美氏がコーディネーターを務め、話題提供者四名がそれぞれ違った観点で「いま石牟礼道子を読むということ」について発表した。澤田由紀子氏は、初めて世に出たときから現在の文庫までの『苦海浄土』の変遷を紹介し、フィクションともノンフィクションともつかないことに着目し、「石牟礼道子リテラシー」というキーワードを提示。山田悠介氏は、石牟礼作品の言葉に「反復」という特徴を見出し、石牟礼を読むことであぶり出される私たちのコミュニケーションの在り方について提示。豊里真弓氏は、リアルであるはずの水俣が抽象的な世界として書かれていくことに着目し、石牟礼を読むことで相対化される私たちの「場所」を知る方法について提示。最後に結城氏は、ともすれば「汚染」による自然と人間のつながりのみに注目が集まりがちな『苦海浄土』について、「汚染」と同時に「生命」による環境と人間のつながりが書かれていることを指摘し、そこに「いま」を生きる私たちは揺さぶられるとした。

質疑応答では、さらに「いま」に重点を置いて議論が深められた。限られた時間の中で四つの観点を提示する濃密なラウンドテーブルであったため、私としては理解が追いつかないと感じる場面が少なからずあったが、「いま石牟礼道子を読むということ」と言ったとき、だれもが「3.11後のいま」を意識していることだけは確かだったように思う。

<第二日目：8月23日>

●個人発表

●パネル発表「エコロジカルな視点で

見たフランス語圏文学」

黒崎 真由美（関東学院大学）

自然豊かな安藤百福自然体験指導者養成センターで開催された、第21回ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会の二日目前半の報告をさせていただきます。本学会にとって、これ以上ふさわしい開催場所はないと思わせる緑あふれる素晴らしい環境の中、二日目の朝はさわやかなお二人の大学院生の個人発表から始まりました。

お一人目の発表者は、東京大学の大学院生、三宅由夏さんでした。タイトルは「ジャマイカ・キンケイド『川底に』における〈わたし〉の記述」です。カリブ海のアンティーガ島に生まれ、渡米後にニューヨークで作品を発表し始めたジャマイカ・キンケイドの初期作品集『川底に』を取り上げ、「わたし」と「母≒環境」の《関係》の変容のあり方を呈示することから、それ



（撮影：結城正美）

を記述する行為についての問題提起をされました。キンケイドの作品に現れる「母」のイメージをある種の「環境」としてとらえた点が、チャレンジングな発表になっていました。

お二人目は、東京大学で美学を専攻する大学院生、青田麻未さんでした。タイトルは「現代英米圏環境美学におけるネイチャー・ライティングの位置——アレン・カールソンの思想を中心とする考察」です。端的にいうと、この発表は環境美学の発展に対するネイチャー・ライティングの寄与を明らかにする試みでした。1970年代から現在まで環境美学の中心的論者であり続けているアレン・カールソンが、具体的にジョン・ミューアやアルド・レオポルドからいかなる影響を受けたかを明らかにし、またネイチャー・ライティングが環境美学においてどのような位置を与えられているのかが検討されました。

二日目前半の最後のプログラムは、パネル発表（フランス語圏パネル）「エコロジカルな視点で見たフランス語圏文学」でした。大辻都さんのコーディネートで、広範な地理的ひろがりをもつフランス語圏の文学が、環境との関わりにおいていかに醸成されたかを、5名の方々がそれぞれのご専門の観点から論じられました。鶴戸聡さん（「涸れ河と猛禽：アルジェリア文学の環境世界」）は、カテブ・ヤシンのテキストを中心に、アルジェリアという環境がいかに描かれるかについて。大辻さん（「ちびジャンと塩鱈」）も一発表者として、口承文芸の地球規模での伝播と鱈のサイクルについて。笠間直穂子さん（「ラミュの描くスイス」）は、シャルル＝フェルディナン・ラミュの描く自然と人間との関係が、スイス固有の文化を表すとともに神話的な普遍性を帯びることについて。工藤晋さん（「揺れの思考」）は、仏領マルティニク島出身のエドゥアール・グリッサンの『ラマンタン湾』に展開される「存在の揺れ」の思考をたどり、作家晩年の越境の詩学について。フランス語圏文学は報告者にとって未知の領域であり、新鮮な感覚を覚えました。

本学会の守備範囲の広さを再認識した今大会でした。豊かな自然の中で知的な刺激を受け、大変充実した時間を過ごすことができました。大会開催委員のお二人をはじめ、かかわったすべての皆様に感謝申し上げます。

●個人発表

●シンポジウム

「自然の風景——発見への問いかけ」

大辻 都（京都造形芸術大学）

はじめてASLE-Japanの大会に参加した。エコクリティシズムが自分にはほぼ未知の分野であるのに加え、都会とははっきり違う小諸の清冽な空気のかなに

あって、発表のどれもが耳新しく、新鮮に感じられた。そんな「素人」の報告者ながら、8月23日午後のセッションをレポートしてみる。

午後最初の発表は、メディア論を専門とする上野俊哉氏（和光大学）。フェリックス・ガタリの造語である「エコソフィー」をキーワードに、現代思想の流れから動物について考える。ハイデガー、デリダ、ペイトソン、ドゥルーズ／ガタリ、マスミ、ハラウェイらを明快に系譜分けしたうえで、「動物が人を見る」「動物になる」など、刺激に満ちた視点を提供してくれた。

芳賀浩一氏（城西国際大学）は、「ポスト3.11文学」と分類される日本の現代小説を取り上げ、とりわけ、佐伯一麦の『還れぬ家』に着目した。長期連載された本作が、東日本大震災を間に挟んだことで、当初の私小説的題材から震災・津波のテーマへと作品の意味を変容させた軌跡をたどる。

二日目結びのセッションは、「自然の風景——発見への問いかけ」と題し、個人発表と共同発表、ラウンドテーブルを組み合わせた多彩な構成。明治大学の管啓次郎研究室を中心とした総勢9名出演の大シンポジウムで、発表者も現役の大学院生やアーティストなどさまざまだった。

羅臼に暮らしながら作品を創る美術家の中村絵美氏は、自身の狩猟・解体経験を通し、鹿の植物的側面に注目したり「食べる」ことで形作られる新たな風景に言及するなど、文学的想像力ともいえるアイデアを展開。写真家の笠間悠貴氏は「気象と写真」と題し、現実には不可視なものの画面における可視化、あるいは逆に画面では不可視な存在の、鑑賞者の側への誘発といった表現の可能性について、ディディ・ユベルマンの言葉なども引用しながら話してくれた。

ラウンドテーブルは、「風景」をめぐるさまざまな角度からのポスター発表をふまえておこなわれた。上城紗葉子氏は都市における占拠されたものとしての緑ではなく、土地の自律的な緑の形成を目指す造園家・田瀬理夫の試みをインゴルドの「軌跡」の思想を重ね合わせながら追った。小金万理恵氏は外界と内界が共存する宮澤賢治の心象スケッチに、ディーブエコロジーの思想を見る。篠塚起己央氏は地図機能を使用するスマホゲーム「イングレス」を取り上げ、身体の移動をとともうゲームの可能性について紹介した。山口将邦氏は、ハーヴァード大学の感覚民族誌学ラボが制作したドキュメンタリー映画『リヴァイアサン』の出現で、人間の視線のみによる映像の構成が自明ではなくなったことに言及した。

これらの発表を受け、さまざまな問題提起やコメントが交わされた。内なる外をいかに活性化すればよいか、自分以外のものを媒介して感覚を得ること……。

この午後にかぎらず今回の大会では、自発的には持ち得なかった刺激的な視点をいくつも発見し、大収穫だった。これらの視点を自分のなかにも取り入れ、育てていきたい。

【学会報告】

第11回ASLE-US大会報告

11th ASLE Biennial Conference: “Notes from Underground: The Depths of Environmental Arts, Culture and Justice”
(University of Idaho, June 23-27, 2015)

松岡 信哉(龍谷大学)

初夏に開催されたASLE-US大会について、会員の松岡信哉さんに報告して頂きました。その規模の大きさとともに、発表・講演の詳細な様子、そして全体的な動向など、大会の臨場感が明瞭に感じ取れる記事を執筆して下さりました。

11th ASLE Biennial Conference 2015は大会テーマをNotes from Underground: The Depths of Environmental Arts, Culture and Justiceと冠し、アイダホ州モスコワのアイダホ大学で6月23日から27日の五日間に渡って開催されました。アイダホ大学ではネバダ大学リノ校から移籍されたScott Slovic氏が教鞭をとられています。Slovic氏のご尽力により今回の大会はこちらで開かれることになったようです。ちなみに私は、広島市立大学Michael Gorman先生、神戸市外大松永京子先生、西南学院大学一谷智子先生と同じ核表象についてのパネルで発表させていただきましたが、光栄なことにSlovic氏にモジュレーターを務めていただきました。

とにかく大会の規模の大きさに圧倒されました。Plenaryなどが行われるメイン会場Bruce M. Pitman CenterのInternational Ballroomは体育館のような大きさで、そこにぎっしりと椅子が敷き詰められていました。Opening remarkを行ったASLE会長のCatriona Sandilandsの言によれば800人台の会員が参集したそうです。改めてプログラムを見ると、六つのPlenaryを核として、AからKまでのパネルセッション(90分)が配されており、それぞれのセッションは18から19の部屋で同時並行して行われています。各セッションは4~5名のパネリストで構成されていますから、たしかに発表者だけで800名前後はいることになります。

とりわけ印象に残ったのは初日のStephanie LeMenager氏、三日目のDonna Haraway氏とAnna Tsing氏によるPlenaryでした。

*Environmental Criticism for the Twenty-First Century*の編者であるLeMenager氏は、environmental humanitiesの使命を“end colonialism,” “a world not dominated by petrocapi-talism”などの、直截的なアクティヴィストの語彙で定義されました。この使命に対して、文学というジャンルは感情を生み出す(“produce affects”) ことによって寄与できる、というのが氏の立場でした。また文学は、①intergenerational memory、②speculative fabulation、③tactical mappingの三つを通して、環境問題への取り組みに貢献できる、との力強いメッセージが打ち出されていました。文学というジャンルの中で、環境

危機の解決という人類史的使命と、個を超えた自由な想像力がどのように切り結ぶのかという問題意識が感じられる話でした。

5分程度の間隔でスピーカーが交替しながら、Haraway氏とTsing氏のPlenaryはエネルギーに進みました。特に、原稿なし、パワーポイント資料をもとに大きな身振り手振りで話すHaraway氏の話は、立て板に水、驚きの記銘力を示す迫力のあるものでした。“Tunneling in the Chthulucene”と題された発表は、地質学で主に18世紀の産業革命以降を指す人新世(Anthropocene)を相対化するpoeticな概念としてChthuluceneを提唱するものでした。Tsing氏の話は『風の谷のナウシカ』の巨大虫オームの画像などととも始まりましたが、Lovecraftが創出した“Chthulu-”の概念は、巨大なタコに人間、そしてドラゴンなどが作るキメラ的な表象です。文学的な想像力が地下や海など人間の目の届かない領域の生命に思いをはせ、それら生命と自己との共生を思い描く時、“partial recuperation, still possible resurgence and multi species abundance”が可能となるような展望が開ける、という趣旨の発表だったと思います。

体力の許すかぎり、できるだけたくさんの発表を聞かせてもらいましたが、文学と環境の問題に迫る各発表のアプローチはきわめて多彩でした。エコクリティシズムのアプローチをとる日本の学会では確固たる軸足として文学作品の精読があると思いますが、今回いろいろと聞いた範囲では、どちらかという生物學など自然科学や環境科学、政策科学などの隣接諸学に重心を置きつつ、ケーススタディとして文学言説を取り上げるものが目立つように思われました。また大命題として地球環境の持続可能性が目標に掲げられているため、脱構築的批評において見られるような、テキストの多義性とか、意味生成作用の豊饒さが抑圧される危惧を少し持ちました。それはさておいて、基調講演、個別報告ともに文学と環境の問題に真摯にとりくむ熱量の高いものばかりであり、共通理念を有する研究者の集いが持つ高揚感が満ちた大会でした。機会があればぜひ再訪したいです。

【学会報告】

ACLA大会 “Ecocriticism in Japan” セミナー報告

和氣 久明 (Bates College)

去る3月27日から三日間シアトルのシェラトンホテルで行われたアメリカ比較文学会 (ACLA) 年次大会で、表題のセミナーを開催した。発表者は日米台湾の大学教員など二名。管啓次郎さん (明治大)、結城正美さん (金沢大)、豊里真弓さん (札幌大)、樋口大佑さん (神戸大)、そして私が ASLE-J 会員。

初日は、樋口さんが石牟礼道子の「非人」(かんじん) をノマド (遊民) として論じ、アレックス・ベイツさん (Dickinson College) が阪神大震災と村上春樹について話し、豊里さんが現代文学における「異界」の表象を取り上げ、結城さんが日本のエコクリティシズムの意味をその起源から問うた。

二日目には、ディーン・ブリンクさん (淡江大) が台湾の和歌サークルについて説明し、華道家の片桐功敦さんが、東北の被災地での花をみずから生ける活動を紹介します。管さんが写真家の赤阪友昭さんが津波被災地で撮影した作品に口頭でテキストを重ね、さらに

2011年3月11日以降に写真を読むことがどういうことなのかを示した。最後に詩人高野吾郎さん (佐賀大) が自作の英語詩を朗読し、会場を静かに湧かせた。

三日目には、ニコレット・リーさん (USC・院) がビデオゲームにおける恐怖と死の表象を論じ、中村和恵さん (明治大) がアイヌ文化とカリブ文化をクロスさせながら語り、ロナルド・ロフタスさん (Willamette University) が、エコクリティシズムを取り入れた授業を紹介、最後に私が宮崎駿の政治的立場の、作品内容との矛盾を論じた。

日本のエコクリティシズムに何ができるのか——答えは、来年3月ハーバード大で行われる次回 ACLA 大会に向けてのセミナー企画 “Ecocriticism in Japan: Season 2”、そして2016年末出版予定の論集 *Ecocriticism in Japan* (仮、Lexington Books) にても模索がつづく。

【ASLE-J-Grad Journal (院生組織だより)】

季節の匂いを美学する

青田 麻未 (東京大学・院)

ASLE-Japan の全国大会は、わたしにとって小諸を訪問する二回目の機会となった。11年前、ちょうど同じ8月、さるエッセイコンクールでわたしの作品が佳作に選ばれ、その授賞式へ出席するために小諸を訪れたのだった。横浜育ちのわたしにとってしなの鉄道の車窓を流れる穏やかな景色は新鮮であったため、いまでも印象に残っている。

そのときのわたしのエッセイの題名は、「季節の匂い」。季節の変わり目になると風が運んでくる匂いについて、じぶんにとって印象深い経験を書き連ねた。現在、わたしは美学を専門として学んでいるが、当時のじぶんには想像できなかったようなつながりが (そもそも美学などという学問があることさえ中学3年生のわたしは知らなかった)、このエッセイのテーマと美学のあいだには横たわっている。

美学はラテン語の *aesthetica*、その語義に照らせば「美」学というよりもむしろ「感性」学としたほうが日本語でのおさまりはよいかもしれない。広義の哲学の一分野として、われわれが感性を通じて世界と出会

うあり方について探求する——これが美学の仕事である。ところが美学史を紐解いてみると、この分野にはある種の偏りが存在していた。19世紀以降の美学が芸術作品に重きを置いたことと関係して、高級感覚と呼ばれる視覚・聴覚を中心とした議論が展開されていったという偏りである。低級感覚とされた触覚・味覚そして嗅覚は、そのあいまいで主観的な性格が手伝って、議論の中心にのぼることは決して多くなかった。

昨今の美学では、こうした状況にかんして新たな展開が生まれている。「美学の感性論的展開」と呼ばれるムーブメントによって、低級感覚を主題化する研究が進んできているのだ。また、五感のくりに縛られないような知覚も注目を集めている。風が運んでくる季節の匂い、われわれはそれを、嗅覚、そしてからだ全体で感じ取っているだろう。中学生のわたしが選んだ題材はいま、美学で以て立ち向かうことのできる問題のひとつとして、わたしのまえにふたたび現れている。

事務局より

■2015年度ASLE-Japan / 文学・環境学会

全国大会第2回役員会・総会のご報告

2015年8月22日(土)～23日(日)、安藤百福自然体験指導者養成センター(〒384-0071 長野県小諸市大久保1100)に於いて、第2回役員会および総会が開催されました。まず、報告事項として、ニューズレターの発行、現会員数(196名)、「会員書誌情報」更新報告と更なる情報提供についての呼びかけ、院生組織の活動報告及び院生代表が山田代表から戸谷新代表に交代となったことが報告されました。審議事項として、2014年度会計報告および監査報告、2015年度予算案の審議がなされ、2014年東アジア環境文学国際シンポジウム会計の余剰金を今後の国際大会の基金とすることが承認されました。会誌印刷会社選定の結果左右社に決まったこと、一部役員改選案が審議の結果承認され、さらに会費未納者への対応策が協議されました。今年度10月の発送時点で会費未納者には会誌は送らないと承認されました。会費未納者への対策については、継続審議することになりました。全国大会は、今泉吉晴先生による演題「シートンの知られざる偉業」の基調講演、6件の個人発表、シンポジウム「動物のいのち」、ラウンドテーブル「いま石牟礼道子を読むということ」、パネル「エコロジカルな視点で見たフランス語圏文学」、2件目のシンポジウム「自然の風景——発見への問いかけ」がおこなわれ、二日間に渡って文学と環境を巡る研究テーマを論じ合い、大変充実した大会でした。茅野佳子実行委員、河野千絵実行委員にはプログラムの企画・編成から、宿泊に至るまで、配慮の行き届いた大会運営をしていただき、この場を借りてお礼を申し上げます。次年度は、福井県に於きまして、浜本実行委員長のもとで全国大会を開催する予定です。会員の皆様にはまたふるってご参加いただけるようお願い申し上げます。

■2016年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会

と き：2016年8月20日(土)～21日(日)

と ころ：福井市地域交流プラザAOSSA (アオッサ)

(〒910-0858 福井市手寄1-4-1)

*日程およびプログラムの詳細については、確定次第、会員メーリングリストやASLE-Japanウェブサイトにてお知らせします。

2016年全国大会での研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。特に「原子力」や「里山」といったテーマのものもお待ちしております。タイトル、発表要旨(800字程度)、連絡先を浜本大会実行委員長(hamamoto★fpu.ac.jp)までお送りください。郵送の場合住所は以下の通りです。(締め切り 2016年3月31日)

送付先：

〒910-1142 福井県吉田郡永平寺町松岡兼定島4丁目1番1号
福井県立大学 学術教養センター

浜本隆三研究室

<会費納入のお願い>

2015年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

<終身会員制度をご活用ください>

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。上遠恵子先生、山里勝己先生がこの度の役員会を経て終身会員とされました。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様をお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻(twain1910★gmail.com)までご連絡ください。ご協力の程、よろしくようお願い申し上げます。

..... 広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の松永京子(kyokomatsunaga★mac.com)までお送り下さい。次回の更新は2016年5月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくようお願いいたします。

ASLE-J広報委員 喜納育江、河野千絵、松永京子

..... 編集後記

ニューズレター第39号をお届けします。本号は8月に小諸で開催された第21回全国大会を中心にASLE-US大会、アメリカ比較文学会(ACLA)大会、と学会報告を主に掲載しています。各大会の活気あふれる様子を誌面からも感じとっていただければ幸いです。re-wildingという現在進行形の出来事をめぐる巻頭言を寄せてくださった管代表はじめ、執筆依頼に快く応じて寄稿して下さった執筆者の方々には心よりお礼を申し上げます。

今号より編集委員の一部が入り替わりしました。前号まで編集代表の任をつとめてくださった村上先生の偉大さを感じつつの作業でしたが、おかげさまで無事に発刊できました。次号には新しい企画を盛り込みたいと新編集体制で考えているところです。会員の皆様からのご意見・ご提案をお待ちしております。(C・A)



【発行】

代表 管啓次郎
事務局 長岡技術科学大学 高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603-1
Tel/Fax: 0258-47-9805 (直通)
E-mail: tayako★vos.nagaokaut.ac.jp

【編集】

編集代表 千里金蘭大学 浅井千晶
〒565-0873
大阪府吹田市藤白台5-25-1
Tel:06-6872-7945 (直通)
Email: c-asai★cs.kinran.ac.jp